

て兄のガレンを殺し去行くのだ剛愎の私の兄の私の可愛い女房を
奪した今宵私の留守の間盗んで行つた折角私の女房よした者を兄哥だ
といふて盗んで行つてソレが私に黙つて居やうか口惜うて泣きたくある
といひつゝ涙をばらばらと落せり、
詐りさらぬ涙を見て鮫太郎の刀を室に収めぬらうさうか貴様の兄哥が貴
様の女房を盗つたといふのか乃公も行かうことよつたら加勢も爲やう
さあハトナ先立立って路の案内して呉うといへハトナハ啼嘩かきし面
まや、笑を帯て欣々として先立立つことを誓ふれ、

第五十六回

簷端より近き椰子の陰月の乗越え青く照して夜静かある會長ガレンが宮
居のうち房の真中大鮫の貝のうちよ正覺坊の齋を盛りて燃したる燈火わ
りてそこよ黒牛のやうある大男芭蕉の席の上よ偃臥りて頬杖つき酔よ霞
める眼を縁のやうよ細くして嬉しさうよ看つひる其眼光をたどり行け

彼方の隅よ身を縮めて戦くお瀧あり
ガレンの身邊よ酒瓶の轉りて盃の覆へり翠しられたる香燕の皮を
散げたりガレンの悠然と右手を伸して酒瓶を傍よ推し退け席の波を展
して敵いて何が怖いか長しいのか亭午の戦よ日本人を逐つて復の軍
の明日の事部下のもの皆海濱の方へと進ませ女子ども山へと遁げ
させ四邊よ乃公とお前影法師とも唯た四人お月様の中で神鬼が併つ
きあがり見て御座るその外かよ見居るもの一人もあいなもんかよ
へて何が怖いかそんかよ泣いて何が悲しいさアこゝへ来いこの薙の上へ
坐れ来ね乃公が傍へ行かうか抱てかへてこの上へ坐らせやうか
へと言語の解らぬお瀧の耳よ唯だ犬の吼るがどとく聞ゆるのみさア来
ぬか来ね乃公が抱て来てやらうと踏蹴と立ち上る、
この時門の編戸の風もあいのよ撲地と簾りて露はれ出でたる日本人一瞥
見たりしお瀧の癒めし身を起しつゝ壁よ傍よ外へと馳せ出し編戸の外

へ身を飛ばせば此時門邊より立ちたりしハトナの胸は衝き當りて反ざま
倒るゝをハトナの身を開いて二歩三歩よろめきながら顔ひき攪みて扶け
起しぬ、マリアナ大酋長眼の八角光炎のやうある舌を吐いて「やア爾ア何
しよ来た地から湧いたか天から降たか惜いおがらも貴様の可愛い善う
れよ来て呉た久しく人の肉を食さい乃公よ貴様の光るものを持って居るお
祈れるお祈つて見ろさア攫み殺して呉るぞ」といひながら右の腕をさし
伸して左の拳で丁々々と敲きながら鮎太郎が頭上より壓しかゝりたる其
の態の古寺の山門より立ち盡したる仁王尊が活て搖ぎて屹然と立つたる如
くあり、
鮎太郎の仰見ながら諸手よ短刀の柄を攫んで心のあたりよ拳も通れと突
き出すを酔歩躊躇ふたぢくど身を閃してガルレンが攫かゝりしその手
の爪の延びて白刃を植ゑたるごとく脚ふみ鳴らして壓しかゝれば柱も揺
ぎ棟も動いて金剛力士もその前より立ちがたきはどの勢猛り荒れたりけ

り鮎太郎躊躇くも身を開いて肩を掠めて斜に流るゝ拳を外し飛び上つて
祈り落す祈られて遠と倒れたるガルレンの虎の吼るやうある一聲高く叫
びたりしが六尺の大男身を縮めて鞘のやうに轉け行きつゝ壁よかけたる
手戟を執んと手を伸すを執せじと鮎太郎遂かけぬ、
魯あるハトナ無學無智の白徒一時の怒に前後の分別を忘れ果て一圓よ
兄を殺さんと逸りて行く途中鮎太郎邂逅ふて己が敵といふを忘れて加勢
を頼みし不覺者身の今外にお流を捉へて逃さじと角力つゝ内の物音凄ま
じくて鮎太郎が勝たか兄哥が勝たか何れ血淋漓の戦今や真最中で氣遣へど
も放せば逃げる逃げられて今までの辛苦が水の泡心の兩個よ身一個
のハトナ頻りよ身を悶える折しもあれ内より聞ゆる魂消る聲ハトナの聲
はす身を震はしぬ、

第五十七回

右の腕を斬り落されての豪氣の酋長も痛手よ堪えず號き叫びて踰越さず

百九十八
がら壁に懸けたる手戟を執らんと左手を伸すを鮎太郎の追ひ纏つて大袈裟に斫り下たり會長のわつと號して身軀を弓のやうに擡げて仰面を打ち倒れぬ

鮎太郎飛び退きて血刀を二揮三揮うち揮りて左手を天庭に摩りつけて筒袖に汗を拭ひ半ばの狂ひし精神を靜めて脚下の死骸を俯視せば我ながら驚ろかるゝ刀の所味鬼のやうな腕の朱に染りて固く拳を握つたるまゝ、彼處に轉ばり六尺の大男の右の肩より背の中央まで斫り下げられて大體の破れしやうある肋の創より血の湧き流れて芭蕉の莖の參差を縫ひつゝ、走りつゝ、蝮蛇の争を以行くと似たり始めて人を殺せし鮎太郎の呼吸はづませて肩揺りて火のやうある顔の紅熱を裂いて剥き出したる眼のさながら珊瑚の珠は漆一點その瞳さへ据りて動かす顔を見知れる人の今こゝまで邂逅ひかば平生の鮎太郎その面影を見損ぬべきほどの血相あり、ハトナノ家の様子の心もとなく右手よか灘の標を攫んで曳すりつゝ、福戸

の邊に首さし入れて一瞥見るより總身の毛を毟がせ覺えずわつと號びて身を痠ゆぬ鮎太郎の脚を揚げて會長が肩を踏み雙手に刀を揮り上げてその太頭を二度三度斫りつけて辛くも首を落し螺髪を指し紛みて提さげつゝ外の方へと躍り出づればハトナもお灘も何地へ行きけん唯だ月のみ浜に渡りて地上の霜かどばかり白く椰子の林の青く煙りし彼方より俄かよ起りし銃聲それに交りて哨喊の聲さてこそ猪谷の猛その部下の水兵と月を浴びてのこの戦ひ意ひがけなき大功を揚げて相見ることの嬉しさに勇みつゝ銃音の聞ゆる方へと走り行けやしとるも逃げ來りし黒奴ども戟を捨て刀を投げ頭の白羽胸の草花揺り落しさながら大波の頰れしとどく推しつ推れつ踏み躓られつ踏み躓りつ宙を踏んで來るその真中へ鮎太郎左手に首級を高く擡げて刀を環のやうに揮り舞しつゝ、割て入り一氣に踏み崩してやがて飛び來る彈丸を潜りて大木の陰を楯と鮎太郎がコゝに居る島の王のガレンの確かよこの鮎太郎が打ち取つてその首を提げ

二百

て来た猪谷さん猛さん鮎太郎のこの樹の陰だ」と大聲に呼はれ、銃音の齊しく止めて草推し分て露はれ出たる水兵の面々その真中より猪谷猛飛びかゝつて抱き上げ「死んだと思ふたよ生きて居たか今が今まで心配して胸が痛んだえ、嬉しうて乃公ア女らしう涙が溢れるこの首級がガルレンか、會長ガルレンの首級これか、して其方のやうな青年が何して大力無雙の會長が首取つた」といひながら髪を攫んで月の光も首級を射させて視つめたり、

鮎太郎も嬉しさよ言葉遣はせ有しが儘を物語る、猛の聴きて雀躍して進めど高く下知の下よ部下の兵士銃を構へて歩調揃え眞一文字も會長が家へと進んで其處を占領し月の明きを幸ひよその夜を籠めて四邊の土壁を打ち靡け抗敵ふものゝ屠り降るものゝ殺さす夜のはがらくと明け渡りし頃よこの島中の土壁をも征服しハトナとお灘どが椰子の林の奥深く潜みしをも引提ねてやがてその日の亭午といふよ猪谷と鮎太郎といふ水兵

を引き連れて吉野丸へと歸り事の仔細を富士山先生へ報告の爲め直さまパオンの島さして走れり、

その夜の波の上よ明けて翌日の朝水か雲かの彼方より烟塵かよ搖曳かせて来る船あり亭午ころよ吉野丸の程近くありけり船よ立てたる旗章の正しく旭日さてり久瀾しや大日本帝國の軍艦

第五十八回

絶て久しく見ざりし大日本帝國の軍艦吉野丸の有ゆる人の皆船邊よ寄り集ひてさあがら久しく故郷を離れたる游子が久しぶりよその母よ逢ひたる心地して懐かしさと嬉しさよ人毎の頬の笑も崩れてひたすらよ眺め入りたり、

上甲板の上よ立ちて眼よ雙眼鏡を推し當て、視め居たりし猪谷猛の顔よて鮎太郎も眼鏡を眼よりア見る膽斗見る察するところこの艦の士官候補生を載せて遠洋航海よ出たものじや彼方でも船端よ士官水夫が肩推し駈

二百二
 べてこの吉野丸を眺めて居る精神が露々するやあの二本の烟突から吐く烟の凄まじく搖曳くさまの海風は吹かれて少しの皺もさく宛然板を張りつけたやうき旭日の旗その勇ましいの眼が覺るき速力なたしか二海里の上を超したアノ軍艦の先頭横須賀で進水式を行つたと聞いた速門號も遠ひのさい佳い軍艦だ絶好しい軍艦だインキのやうな黒い海があれ彼の通り一里も續く白波を曳いて居るぞ上甲板も居るの艦長艦長も遠ひさい髯男の眼も入つたか胸も閃々するもの雙光旭日章白と青との縹の見ゆるかそれ正しく金鵄勳章見えたか彼の髯男が「猪谷猛の快げよ笑ひけり」

鮫太郎は瞬きもせず眺め入りしが軍艦の次第次第に近よりにて豆ほどの人の顔のやがて大きくも来りて眉も眼も定かみ見ゆるばかりありたり眼鏡も映る艦長のその顔容何やら前より一度は逢つた人らしく金筋入りたる帽子の形さらさらと日は燃やき胸の透の勳章も光り眩ゆく肩廣ければ怒

らず身幹のゆらりと高く眉の太く眼の大きく髯の霜のや、蒸ければ勢ひよく左手も撮ねたる有様さう見ても始めて見し人と思はれず鮫太郎の良や久しく眼鏡を放さず視つめ居しが俄か眼鏡を放して一聲高く號びながら小膝を敲き「猪谷さんあの艦長の禮那だ私に善く知つて居るアノ娘御の兩人も善く知つて居るうむ思ひ出た正しく春海の大旦那だ白毛まぢりのアノ髯が何よりの證據ヒンと撮たるアノ髯アノ髯が春海さまださうだ」春海様がアノ髯を喜ばしさと言葉乱れし鮫太郎

猪谷阿々と打ち笑ひて「其方のいふこと僕も頼むと解りかねるアノ艦長が春海といふて其方がそれを知つて居るのかうむ春海大佐か海軍大佐春海沈雄が先年魯西亞との戦争に抜群の功を揚げた功三級の春海大佐か珍らしや春海大佐高名の跡で知る太平洋の真中で逢ふといふも不思議じやあわれ信號旗が揚つたぞ眼鏡を貸して呉ハ、アこの船は何國の船じやとの信號だ困つたやア海賊船とも言はれんし日本國の船ともいねぬ大人

二百四
 の國の船といつても彼方より解るまい好いはく「斯う返事を爲る無籍の船だ併しおがら乗込人の日本人ばかりだと斯う答へる」と指揮したり、怪しき船が見慣ぬ章の旗を立て、行くさまの不思議あるを見答ゆし日本軍艦「無籍の船しかしおがら乗組の日本人とどのみ答へいよ」以て不思議あり噂は聞け、東太平洋の島々へ空船の折々漂ひ着くことありどか畢竟皆海賊の爲す業この船も海賊か乗組人が我が帝國の人ばかりと彼へ言へど油断のありがたし必許すお若し不穩の氣色が見ねたら速射砲を打つ放して彈丸の雨を浴せかけて人もるどもその船を蜂の巢のやうにして撃沈める先づ「留れ」と命令し「艦長の下知しつゝ、視つめたり、吉野丸の命令のどとく留まりたり速門號の速力を緩めてその傍より來り、その間の僅か二三町信號兵の今速門の上甲板より立ちおがら右手と左手より二旗の旗を打ち振りはじめる、

第五十九回

軍艦速門の上甲板より信號兵の紅と白の旗を揮りて何處より何處へ行くと船ぞと問ひかけたり吉野丸のこれ又答へて我が船のこの南十哩ばかりにあるパゴンの島とて實に新日本の國の一片大人の國と歸る船あり其島よの一人の豪傑ありて大日本帝國の軍艦を俟こと久しとぞ申ける小旗と小旗との話の興入りて艦長春海大佐の面白しと掌を打ち鳴し「大人の國をこそ一人の豪傑が居て日本帝國の軍艦を俟こと久しと面白し新日本の國の一片と面白し何ぞ英雄か豪傑か行て逢て會話を爲やうマリアナ群島の中の孤島パゴンの島の海圖で見れば粟粒のやうな島とやが其島が日本人ばかりの島で加之大人の國と名をつけたと愉快じやお不思議だか、

「兎も角誰れか輕艇に乗て彼の船の船長と逢つて來い海賊の船と思ふが同じ國の人と正可敵意の挟むまい波原分隊長貴様行け」と命ずれば分隊長の直さま輕艇を卸させて五人の水夫と乗り込みやがて吉野丸へと漕ぎ付

二百六

れ、吉野丸の舷門より細梯子の垂れ下る波原分隊長の最先に續いて五人の水夫の聲が登れ、船長猪谷の猛り欣然として舷門を分隊長の一行を迎へて船長室を誘ひ入れ、大人の國の有様富士山朝彦の來歴同志の目的を委しく語り、連門號の艦長春海大佐も今より大人の島へ來臨あらんことを請ひ、この吉野丸その水先の案内せんと、恭やしく申したり、物語を聴きつゝ愉快な堪えぬ波原分隊長進められたる三鞭酒を微醺の元氣よく送り、この顛末を艦長へと復命すれば艦長はいよいよ興がりていざその大人の國の王ある富士山朝彦を逢んと勇みぬ。

斯て吉野丸の先導して帝國軍艦連門號の大人の國の港に入りぬ、幾々たる大人の岩の笑つて連門號を迎へて艦の中の諸人を驚かしぬ、艦長春海大佐は多くの士官と水兵と共に歡迎されつゝ上陸すれば數多の日本人を隨へて大人の岩の下ある路へ出迎へたる富士山朝彦漆のやうある、櫻桃の華の色そのまゝの顔六尺の身軀を悠然と進ませて腰を折り、御高名の豫て承は

二百七

り居るもまだ拜眉の榮を得させぬ海軍大佐春海沈雄のよひ善くこそこへ光臨あられし某の富士山朝彦とて三年前よりこの孤島に在浪人と會釋しつゝ先立ちて彼の宮居へと案内しぬ、さて牛を屠り鶏を割きこゝに盛る酒宴を開きて富士山の只管春海大佐一行の士官水夫を款待たり、初對面より胸襟推し披きて笑ひつ語る兩個の豪傑春海大佐の高脚盃の酒を飲乾て富士山は囁し聴けば聴くほど話すほど愉快じやあこの黒髯公乃公の今日はどの愉快なさいこの南洋の新日本國もやつて來て貴様のやうな豪傑と酒を飲んで語し合ふの富士山の聲を片手も掀げながら囁れし酒を一氣に乾して餘瀝を残さず乃公も愉快じや久廻りして日本帝國の軍艦を看高名を豫て聞いた大佐どの酒を飲ひ今日の一斗の酒を乾し十斤の肉を盡して思ふさ語り暮さうまづ聴きたさき東洋の今日の形勢「春海大佐の快上げ打笑つては、東洋の形勢が大分面白うあつて來たぞ來年の二月末北支那北朝鮮浦蓋わたりの氷の解けるその折より支那海日本

二百八
海のその間、前代未聞の大規模が始まる。極つた乃公も老後の快戦しやう軍人の死ぬ時が来た乃公のやうな禿頭の斯ういふ時は死さなければ青年も輕蔑される恐れよ露西亞が東方露領の防備に二十万の兵を出した。今年春からして支那の北洋艦隊の新軍艦の乃公が布哇のホノル、居つた時英國からの電報を見たが先月の晦日、六艘とも進水式が済んだ。うまいづれ今年の十二月末より勇ましく支那へと回航するであらう六艘のうち威東威西といふ姉妹の戦艦、一万二千噸十八ノットの速力だ。富士山の胸を打て躍り上り春海をその支那の北洋艦隊の新軍艦のたしか。今年十二月の下旬ごろより支那の或港へ着く日順かして其の武裝の「支那も着いた上で武裝するとか」して其の六艘の艦種は「戦艦、威東威西巡洋艦、威南威北威中の三艦外、報知艦の威外都て六艘」

第六十回

去年の夏の初めより速門艦長春海大佐の海軍士官候補生二十餘名を載せ

て遠洋航海の途より先太平洋を横ぎりて布哇より南洋の島々を巡りて、れより印度洋へ出で、呂宋臺灣支那の沿海に立ち寄りその翌年の正月七日愛たく航海を終りて速門艦の横須賀軍港に歸り来たれり今日歸るとの電報永田町ある春海の邸に着きし時の喜びの如何ありしやらん春海夫人を始め君子艶子の二令嬢朝早くよりお花装して九時三十分の新橋發の汽車に乗り込みて大船停車場へ出迎ふと勇み行きぬやがて横須賀發の車にこゝろ落ち合いて乗る人降る人その人の波を推し分けて露はれ出でたるの白毛交りの撥鬚をそれと知らるゝ春海大佐満面笑を湛えて「やア来て居たか永々留守で淋しかつたらうか、君子も艶子も大分立派な新造よあつたか一年ばかりのうちに奥前も大分皺が出来たか乃公も白髪が殖えたらう大洋の潮風も染め上げた乃公の面鏡も對つて是が自分の面かと思ふ黒光の乃公の面を善く見忘れず居たかア艶貴様の何が耻かしうて姉様の背後も滅れるサア一處も来い面白い話を聴してやるぞ」といひあ

から嬌羞む艶子の手を執りて上等室の扉を開けて海老色天鵝絨の蒲團の上へ腰うちかけぬ、

春海夫人も君子も艶子も一年の間の離愁今日露れて嬉しさう先づ催はし來たる暗涙の打ち濡りたる物語を父の耳に入ると、又違ふく快活ある春海大佐の老てますます、壯ある好軍人右も艶子左も君子その手を執りて己が膝へと打ち載せて春海夫人と對坐ひつ、夫人の言葉察あも留守中の事をも物語る大佐の聴きつ、點頭つ、快びも打ち笑ふて何事も骨折く、またこれからも大骨折だお前も新聞や人の噂で知ッても居やうが日本と露西亞と支那の關係がだんく切迫して來て今年夏の夏の初ぐらゐの復讐戦争の有らしい形勢明治廿七八年の清國征伐卅五年の魯士亞征伐夫の戦争の稽古今度のが真正の戦争日本全國心を合せてこの大難を打攘へ、吾日本帝國の世界の敵のやい大強國であるのじや軍艦の十隻や二十隻人の十萬や二十萬人ぐらゐ沈めたり亡くあしたりしあけれぬ大勝利の獲られぬ

い次第面白くあつて來たぞ時よ君やお前方も面白い話をしてやるお前方の沼津の別墅の近所の漁夫の子で鮎太郎といふ少年を知て居るか」と問はれて兩人の顔見合せて不思議の面色艶子の笑しげは仰見きて「父様知つて居ますよその鮎太郎といふ童子のね親孝行の童子でしてね毎日く海へ這入つて榮螺を撿つて親を養つて居ましたがね一昨年親が巡禮どかよ出て自分の大漁師の家は世話もあつて居たといふことですが去年の七月姉さまと別墅へ行つたその日沖で暴風と逢て行衛知れずとありました誠に活潑で正直でどんかよ面白い佳い童子でしたらう五島の兄様も大層賞て居らつしやいましたよ母様も存知で彦座いませうあのそれ何日か庭でお目よかゝりました可愛らしい面をして居たあの童子で彦座いませう父様の善く存知で彦座いませうねえその鮎太郎が何いたしましたので彦座いませうか」大層賞るお前方の知てるその童子今でい童子でいかい中大人の鮎太郎その鮎太郎の豪傑じやぞ南洋マリアナ群島のうちのバコンの

島といふところゝ居る大海賊の大將富士山船彦の麾下ゝあつて今で
 船の長とあつて居る』
 夫人も君子も艶子も顔見合せて一語おし夫人のやがて口を開き『へえあの
 鮎太郎が海賊の船長あんか可愛かつた童子がですか』君子のついで『あ
 ん子が海賊あんてほんど人見かけよらいものですことお、嫌
 こと彼子が海賊』と意味ありげに艶子の顔を見る艶子の黙然
 汽車の今八重洲町ある中央大停車場ゝ着きたり大佐親子の多くの出迎人
 ゝ擁せられて車を降りて場外ゝ新聞賣子の鈴聲高し唯今出ました號外
 』

第六十一回

一年の間着通したる戎服を脱ぎすて、種ゆるかある日本服ゝ身軀安穩
 八丈の蒲團ゝ小胡坐の膝を埋めて春海大佐の今君子の房ゝ在りて姉妹と
 時語る春風の房ゝ遅ねし折しも下婢の奉の一枚の新聞號外を持ち來りて
 がらこれを姉ある君子ゝ渡しぬ、

岡の外ゝ三指の優雅な會釋して艶子ゝ渡しぬ艶子の先づ最初の二號活字
 に眼を注ぎて『父様號外が参りましたおや大變ですなえ父様支那の北洋艦
 隊六隻が厦門の沖で行衛知れずゝありましたとさ大變ですなえ』といひ
 春海大佐の葉巻を悠然と吸いながら煙の搖曳くその中ゝ笑顔ゆたかゝ
 うか六隻が行衛知れずあつたかは、ア到頭斷行たあ斷行たあ到頭、君子を
 の後を讀んで呉れ』と餘り驚ろかぬ口氣ゝ君子も艶子も父の顔をうち成り
 『父様の疾うから存知あに到頭斷行たあんで仰しや』と諸聲は問へ
 父の點頭くども掉頭するもつかず笑を帯びて『は、乃公の去年の九月で
 ろからその事知つて居るよしかし斷行たといふこと、今初めて聞いた
 君子その後を讀んで呉れ』君子の眼を號外ゝ滑らせ『清國政府が豫て英國
 ラームス造船會社ゝ注文したる北洋艦隊六隻の何か取急くとありて天津
 まで武装を整頓するとさし早くも回航の途ゝ上り十二月廿三日亞工廠

を發したりしが大暴風よてもありしよや六隻とも行衛知れずとありたり
尤も一月一日は厦門を出帆したる英國の飛脚船の厦門を去ること一百海
里のところよて確か六隻の清國軍艦も出逢たりといふかうですよ父様
と霞み終りて父の顔を仰見たり跪子の膝進ませせて「父様の虚言ばかり仰し
やつて一月の元日は大暴風のあることをどうして去年の九月よお分り
すかだが乃公好い氣味ですなね妻が三歳の時の支那征伐より伊東中將さ
んも威海衛で北洋艦隊を撃沈められたり分捕されたりして復た今度の大
暴風で行衛知れずと可哀さうおはせ好い氣味ですなね」眞正又愉快じや
あ富士山朝彦うまく成功たか「おさんです富士の山が何かいたしました
の」「うむ富士の山富士の山高いか」「元談ばかり父様の仰やつて富士
の山の高いの當然ですなえ併し富士の山より高い山が明治廿八年より
一個殖ました臺灣のモリソン山「は、アさうかさうであつたましかし乃
公が去年南洋の大人の國といふ島へ速門で寄港した時そこでも富士の山よ

違つたよ身軀が高くて黒い髪が有て宛で繪も描た唐の關羽も日本の衣服
を着せたやうな豪傑奴も違つたよこれは失策た山よの髯も無かア髯は、
「知ませんよ存じませんよンお事ばかり仰しやつてね姉様大人の
國そんな國は世界の地圖の何處も有ます世のまだ開化しな時より小人
島だの大人島だの鬼が島ああるやうよ人も言ひ書も記いてあります
がこの開けた世の中よンナ國が何處もありません」「これ、ンナ怒
るあよ大人の國といつて身体の一丈もある人が棲んで居るのでなく
よ孔があつてそこへ松を通して掛がれて行く人の棲む島でなく矢張り
が横まついて鼻が堅まついて居る尋常の人間しかも日本人が棲んで居ると
ころだ元ハゴンの島といつたが日本人が大人の國と名をつけたのだそ
の島の港口よ大きな人の形を作て居る處があるからさ解つたか君も跪も
と語る折から下婢の春を案内入り來りたる五島秀夫ありやア秀夫さ
ん久闊だつたねと春海大佐の笑つて迎へぬ君子の少し座を退きて唯だ黙

禮秀夫の聲も「呀々しく今日お歸朝で御座いましたか私も今晚はいよいよ出立どの命令が下りました」は、その愉快じや腕を捻をかけて「堅乎やれ」

第六十二回

春海大佐の床を背よ五島少尉の庭を後よ對座へり一人の銀匙鉤のごとく眼光するどき老艦長一人の眉目備秀ある好軍人この時君子艶子の姉妹の座を去りて四邊よ人あし、満面の快色華のごとき春海大佐の手よせる號外を膝よ落して葉巻烟草の灰を火桶の上よ彈き威東威西威南威北威中威外の六隻一個も殘さず好くもまア奪つたのだか乃公畏ろしいを富士山朝彦といふ人の彼ら固駭州の或寺の坊主であつたが伊藤政府が遠東還附の大失策よ憤慨して大に爲すところあらんといふ意氣を以て男子と今の世よ生れた奴か備備さんぞを爲て居る時でさいと墨染の衣を脱いで髪を生し先づ支那へ渡つて滿州よ

り西比利亞を跋渉し復た日本へ歸つて來たもの、世の有様を見るよつけて慨げき悲しみ失望のあまり或豪富を説きつけて二艘の船と金を借り活潑有爲の青年を選び抜いて南洋へ渡りそこよパゴンの島を發見して本據地とし太平洋や印度洋の波の上での海賊をして船と金とを奪ひ取りその船とその金とでいつか一度の世界の人を驚かすやうな偉業を成さんとさういふ了簡で到頭十何艘といふ大船よそれよ平衡よ武器を用意して來年あたりから漸次仕事を取りかゝらふとするところと乃公に話したがどうして彼が一万二千噸の甲鐵艦の威東威西五千噸の巡洋艦威北威南威中三千五百噸の報知艦威外を十五艘の木造船で分奪たかア殆ど鬼神のやうな伎倆勿論部下の壯者の次第殖えて三千人よもあつたさうだ富士山先生の命令から火をも踏み水をも潜るといふ命不知の奴輩だから森薙と敵の船へ乗りつけ日本刀を揮り回して大血戦をしたよ遠ひあからう實よ愉快じや秀夫さん戦が首尾よく大勝利でお互ひよ生て再び逢ふ時もあつたらその當

士山朝彦を胸に紹介させようと思はるべき人物だ。五島少尉の眉を軒上げて氣色霽々と握りし拳は膝を敲いて「浮話を伺つたばかりで身顔が出るほどです。誠にその富士山朝彦といふ人物の非常なる英物です。あゝまだ武装をしない軍艦といへば武力の完全でない船で善く打ち勝ましたか頼母しいの日本人です。實に世界無比の武勇を現はしたのです。さういふさうじや併し富士山方も大分船を傷めたらしい先程同僚が來ての話は今朝臺灣からの電報に據ると西海岸は散々焼毀された三艘の船が漂着したさうか。兎に角愉快の話でないか清國政府の狼狽の想ひやられる」

やがて日の暮たり餓別の小宴の閑かぬ微醉の五島少尉の時來れりとして別を告げて起ち上る春海大佐春海夫人君子艶子も玄關まで送り出づ大佐は五島少尉の手を握つて「緊乎頼むぞ仰見たる少尉の眼は異光あり唯だ無言と點頭ながら劍の柄に手をかけて二歩三歩あゆみ出す大佐の君子を顧みて「君も艶も門外まで五島さんを送つてあげる。欣々どかけ出したる艶

子の少尉の右手は絶りながら豊やかある頬を笑ふ崩して兄様今夜直ぐも水雷艇に乗つて戦へ行くの之兄様と問かゝるを少尉は唯點頭さしのみ猶豫つゝも後より眼さ來たる君子娘月の今玄關前の三笠松の枝は懸りて清光水のごとく君子の顔の月を青みていと寂し流盼し私と見る眼の端りかくも願ひし少尉の眼と合ひぬ君子の見られしと機を向く少尉はやがて門を出で帽子の廂と手を軽くかけながら會釋して寂しき笑顔に向け浮機嫌好うどの一言を殘しつゝ急歩を辭し去りたり、

門の柱は傍て立ちたる君子娘月の下たる意中の人の影消るまで見送りたり艶子の袂を扣きて姉様さア家へ入りませう子、風が寒いことまたか風邪でも召しますよ姉の聲のやゝ顔えぬ好い月だこともう少し並み居やうよ」

敵の露士亞と支那帝國世界の二大國を敵手としての戦いこそ大日本帝國

二百二十
 の名譽され三千年來練り鍛へたる大和魂ふり起して勇み奮ふ五千萬人の
 心の一團花のさくら人の武士その海陸の軍人の日本國の國境より一歩あり
 とも敵の土を踏せしむる誓ひたり、
 臺灣艦隊より高砂號を旗艦として軍艦都て十三隻支那の南洋艦隊を徹
 りせんと臺灣海峡を往來し西海艦隊の筑紫號を旗艦として都合十六隻對
 島を境より九州の海を浮びて敵艦來れども後ち捕ふ日本海艦隊の二荒號を旗
 艦として都て十八隻敵艦を打ち破りて一氣に浦鹽港を衝くと勇み立つ、
 時の來れり明治四十二年の四月の一日日本海艦隊の司令長官天風海軍大
 將の旗艦二荒號を怒りて教習舞鶴宮津の沿海を警戒しつゝ次第に隱岐の
 島の彼方へと進む折しも東北の方より當りて幾條の黒煙搖曳あがる檣塔の
 上の水兵の聲高く「と呼りぬ敵艦見たり敵艦見たり」
 天風大將の雙眼鏡を執つて良久し眺め入りてやがて微笑て下知を下し
 諸艦に戰鬪用意の信號して「敵の正しく黒龍艦隊察するところ舞鶴港を砲

二百二十一
 撃してそれを占領し京都と大坂を兵を進めて日本國を兩つに割るの軍器
 あり腕のかぎり彈丸のかぎり艦の撃れて沈むかぎり敵の艦一隻も餘さず
 擊沈め世界より日本男兒の武勇を耀かせ世が滅びて戦ひの難義酒飲むもの
 の嘔吐つかぬまで酒を飲み飯食ふもの、世の裂ぬはせぬ飯食へど、兵
 部より寄贈の酒樽その鏡を打ち振きて柄杓で牛飲らせ種々の食物を山
 築きて攫んで食ふと任せたり人々勇氣日頃は百倍しやがて徐々持場
 を固めたり今まで陣はしかりし艦のうち今の落ちたる針の音までも明や
 り聞ゆるやうに寂然とあり皆赤眉を軒げ唇を結んで木像のやうに立ッた
 るまゝ身揺るもせず、
 線香の煙そのまゝ見えたりし數條の黒煙のやがて次第に太くありて今
 や明々地とその軍艦の數まで見られたり實に黒龍艦隊の旗艦アムール號
 を先頭と立て、都て二十隻渡まじく黒煙を吐きながら眞一文字を進み來
 るその時天より一點の雲さく海にインキの色をさして波濤やかまじく弄

二百二十一
そと處の隠蔽の東十五里の海の上春の日の露々しき日本海は兩國の大艦隊が晴の戦開天風大將の軍旗陣を隊列を整へて十八隻の軍艦の青波白波八重の波を蹴破て豁然に進み行く兩艦隊のハヤ四千米突の近くまで押し寄せぬ氣を苛ちたる露士亞艦隊の旗艦より牡丹の花のやうなる砲烟五六輪七八輪開くよと見る間流星のやうな凄まじく鳴り波りて彈丸の飛び來りて我艦隊の前は落つれば波の驚きて立ち升ること五六丈血氣の勇士の握る拳を震はして齒をくひ切り撃てどの命令今や避しと待ち構ふ、旗艦二荒の檣に信號旗の旗を揚りて撃てどの命令の明か又讀れたり振劔の士官その號令を繰り返し言葉の下よりの的を定めし砲口を敵の艦その太肚司令塔思ひくく覗つて撃ち出す大砲の響き潮の簾り天の崩るゝばかりあり撃ちつゝ兩艦隊の北と南と馳せ交ひまた南と北と馳せ交ひて戦ふこと二時間あまりされ我の十八隻敵の我より多きこと二隻あれば死ねゝ進めゝと勇み立てて敵の艦隊少しも棄れず整々堂々として進み

來る司令塔も屹と立ちたる天風大將ふと見ればこの什麼遊撃隊の先頭を來る速門號の黃の烟を包まれて艦脚返し正しく敵の彈丸を啗つて火災を起したるものと覺し。

第六十四回

速門號の艦長春海大佐のこの晴れたる海の上の晴れの合戦華々しく勇戦して一生の幸公をこの日の時盡さばやと身は海軍大佐の正服を着けて種々の勳章を胸懸け上甲板に立つたるまゝ一寸も其處より動かす敵艦を覗みつゝ號令と聲を囁らし士官水兵を勵まし居たるその折しも敵よりうち出したる大彈丸の艦首の三十三珊の巨砲の中り斜に甲板の上を落て破裂したり烟裂け電走りて其處に立ちたる十餘人の武士の肉體とありて消し飛びたる火の四邊に燃れ移りて火災とぞ成りよける、火災よと立ち騒ぐ諸人の叫び合ひて喇叭の口より瀧どばかり水水を吐かせて消さんとすれど火のいよゝ盛んありて見るゝうちも焼け擴がる、

春海大佐の五臟六腑を推し絞りたる聲張り上げ敵の艦一艘をも撃ち沈めず、彈丸を啗って火災を起すえ、吾が武運も今日盡た火のやがて火薬庫に移つてこの艦の裂けて沈むそれまで進め、敵を選ばず衝突で帝國軍艦速門の最期の勇しきを朱碧をも見せて吳う全速力で進め進めと號令せり艦中の人々奮ひ勇みて砲手の砲を射ちつ、け响筒方の火を拒ぎつゝ、豁然と馳せ向ふ。

この時我が艦隊より射ち出だしたる砲丸の敵の一艦も中りて見事なそれを沈ませたり敵艦のやゝ色めき渡るやがて復た一艘の火災を起して彼方より走りぬ敵艦次第に亂れたり亂れたれど尙頑固に進み戦ふ折しもあれ露れたる空の何時の間もやら陰り初めてやがて小雨とあり小雨の次第に霧とありて海をたて籠め敵の艦隊の影より淡しこれ衝突し屈強と春海大佐の舞々ど乗り出づれば忽ち眼の前を掃ぎ出でたる敵の大艦速門の砲手の力の限り速射砲の彈丸を霰れど浴びせかくれば敵も負じど砲うちかくる

その間を一文字も押進んで割て入る敵の艦脚のしきるゝ亂れて艦体やがて傾き初め彼方へと艦首を回して走りたり速門のこの時全た敵の艦隊の間を挟まりて左右に敵を受けたれども敵の速門を中として雙方より砲うちかくれば的の外たるその砲丸の却つて味方の艦も中りて同志隊の胡蘆を殘さんと思ひ唯だ速門よりうち出したる彈丸を浴びつゝ思ふがまゝに振舞はず速門の散々又戦ひてその櫓を敵の彈丸も碎かれあがら摩り脱けて本艦隊へと馳せ加はりしが火災のこの時辛くも消し止めたり。

戦の五時間と涉りて亭午を過たり生憎の霧も思ふがまゝの戦出來ねど七分の勝り我も歸したり殘る三分も勝ち終せてこの戦も黒龍艦隊一隻も遁さしど尙戦ひを續けしが敵の霧も紛れて次第と見ん引き揚ぐる様子が見ねたりこの霧のうちに潜りて水雷艇を縦ちて見んと天風大將の號令今しも戦列の傍に在りし水雷母艦のその陰より霧のやうに走せ出したる七隻の水雷艇第一番も乗り出したるに正しく準號その艇長こそ先月少尉より

二百二十六
大尉は進みし五島秀夫その人かれ今日こそと覺悟を極めし五島大尉霧の底に艇を潜めて好きをど看渡たせし敵も去者同じく数隻の水雷艇を放ちて我が艦隊を碎かんと用意の様子油断あらじと進み行けば霧のさながら白き霧を張りたるそのうち大山のやうある黒き影あれよと大尉の船を向くるを目敏く發見たる敵の軍艦兩とばかりは射かけたる彈丸の下軍號の蜂の巢そのまゝと撃ち抜かれて人諸共海底深く沈むか愛死活の一刹那海龍王と震ひ死すかと怪しむばかりの海底の凄まじき響と共逆だつ大波のうち大山のやうある敵艦の見ゆすありけり

第六十五回

霧の底に艇を潜めて射出したる魚形水雷敵艦の太肚を正しく突き貫ぬきて十丈の巨浪を揚げ山のごとき甲鐵艦を碎く間も打ち沈めたり
碎け沈みしその艦の黒龍艦隊のうちの一萬五千噸速力十八哩の加林號ありされ敵艦や色ゆきて陣立次第も亂るを天風大將の得たりか

しこしと艦を進め黄昏までまさしも優勢の敵艦を打ち退げて勇ましく凱歌を唱へたり黒龍艦隊の散々も撃ちあされて辛くも本據地ある浦並へと逃げ歸りしが二十隻の艦その一隻の水雷も打ち沈められ三隻の焼亡せし二隻の彈丸も中りて沈み残る四十隻の軍艦も皆痛く創を負ひて物の用も立つべくもあらざりけりさてまた爰も黄海艦隊の支那の南海艦隊と力を併せ三十餘隻の軍艦の同じ日の朝より對島を攻め奪つて本據地を占し且つまた日本海艦隊と西海艦隊との聯絡を断ち日本海艦隊を袋の中の鼠とあして黒龍艦隊を思ふが儘も日本の北陸山陽の港へ進めんと謀計を企み勢ひ猛く攻め寄せたりしを西海艦隊の司令官長松浦大將の旗艦の筑紫も在りてこの大艦隊を玄海灘の上へ迎へ戦かひ朝より夜までの大海戦も敵の艦三隻を打ち沈めたれを我も亦た四隻の艦も火災を起しその日の八分の勝ちがら猶明日の戦ひせんと引き揚げたるその夜關は一天俄かよかき曇り弘安の昔を今も見る神風の荒びも荒びてやがて夜東より白み渡

り米塗の大艦そのまゝの日輪横雲を推し披いて帳り出で血を流せるやう
な紅き波の彼方此方敵の戦艦の不知案内の海の底より峭立たる岩も碎
かれ逸早くも沖へと逝きし艦も助り残されし艦の數々漂ひたる有様を櫻
浦大將これを視て急ぎ艦隊を進めて難あくらう沈めつやがて戦ひの終る
折して彼方より黒煙を高く掲げて走せ來る數隻の黒船あり、
敵の艦かど見れば然らば味方の艦かど見れば見慣れぬ旗を掲げたり
不思議の眉を松浦大將の盛めつゝ次第に近づけば是れこれ今年の一
月しかも一日厦門の沖を消えて亡せたる支那北洋の新艦隊その艦隊の長
誰れぞや正しく富士山朝彦

浦城の守もやがて解け旅順もまた落たり日本全國廿四師團その半の二
手に分れて一の旅順一は浦城へと上陸しぬ兵に都て六十万人威風な世界の
草木を震ひ靡かす浦城の守解たる數日の後日本海艦隊の連門艦長春海大

佐の占領したる砲臺を檢分せんとて大尉五島秀夫と共に陸ま上ばり最高
の砲臺その絶頂より海山の景色を眺めどうだ秀夫さん好い形勝でなさい
か若し我が日本帝國の軍人一萬人よこの砲臺を守らせたら確かよ二十萬
の敵軍を拒ぐことが出来るがア併し敵も薩摩流の背面攻撃よん驚いた
らう其方も森い勳功をしたあし善く死あゝかつたあ加林號を卿が打
ち沈めたその功が全く勝利を我が艦隊の手で握らせたのだ本國の新聞
をい定めて卿の肖像を掲げて其の軍功を狂氣のやうにまつて稱めて居る
であらうそれまつけても彼の君子君子も啼て居るだらう嬉し涙を流し
て『快げよ打ち笑ふ秀夫の劔の輝を握りつゝ片頬に笑を湛之敵艦の一隻
ぐらゐ沈めたとてさう仰しやつては僕に冷汗が流れます振舞の勳功とい
大佐どの、こゝ右舷左舷の大砲を連射して敵艦隊の真中へ割て入つた彼
の沙勇氣身顛ひの出るほど凄まじく勇ましいその有様その爲め敵の艦列
が亂れて勝利の我を歸しましたのです』乃公の艦にその時の火災を起した

から無鐵砲か事を行つたのよや、彼方を見ろ黒髯の桃橋漢がやつて来たぞ、
やア富士山朝彦か久淵いさア」

第六十六回

身ふ洋服を着けたれども腰みの横たふ日本刀室のうちよの龍睡りてこの
日本一の豪傑富士山朝彦を護るあり黒髯を左手よ握りて桃華の顔よ笑を
湛に後よ眉秀で眼涼しき青年を随へ徐々よ六尺ゆたかの身軀を揺けて春
海大佐の前へと歩を進むれば大佐も笑つて歩み寄る、

端くりあくる兩個の豪傑の新占領地の砲臺の上よて迷ひぬ少時の顔見合
せて無言のうちよ千萬無量の情を送りつやがて大佐が差し符べたる其の
手を富士山の握つて打ち振りて久淵しや大佐どの「久淵しや富士山どの」
「去年の九月大人の國で逢ふてから既う半歳を超へましたぞ」「一月一日の
厦門沖足下でなければ出来ぬ業足下が微ければ今度の戦も斯う絶好く
行くまいぞ」は、併し惜しきことを乃公の爲た片腕ども頼んだ猪谷その

猪谷の猛の厦門沖で亡られました乃公の船も其の時敵の報知艦威外よ乗
り沈められて危うく乃公も藻屑よ成らうとする所をこの鮫太郎此奴が
必死の働きで乃公を救ひ上げて呉たばかりか橋を敵の艦へと倒し架けて
壯者どもと斬入つたその勇氣末願母しい青年ですこの青年の居たばかり
で兎も角仕事が成功したのです」

富士山の背よ立ちたる鮫太郎顔を少し振らめて首を垂れしが大佐の傍よ
在す人こそ三年前身沼津荒浪よ在し時春海どの、別荘其處よ見えて
世界地圖の話を聴きし五島どのよ相違おしと叮嚀よ黙禮すれば大尉も黙
禮春海大佐の願きて「五島この方が先頭刺し怖るべき人物だと噂をした
寂傑富士山朝彦どのだ富士山君是の彼の日本の海戦の折加林號を碎き
沈めた海軍大尉五島秀夫です」富士山の恭しく一禮する五島の手を執りて
「卿が五島秀夫どのかこの度の御戦功の海戦第一豫ておん噂さの鮫太郎よ
りこれ鮫太郎五島どのよ御挨拶を申し上げんか言葉を潮よ鮫太郎の歩み

を進めぬ五島大尉も兩歩三歩進み寄りぬ大尉のその肩も手をかけて「鮎太郎さん久瀬ぶりでしたね濱の御音堂の別墅の二階で御も世界の地圖を見せて話をしたとがありましたね彼の館漁の時脚が丸太を揮り上げて沙の上の大館を打ち殺したその勇ましさのまだ眼の前も彷彿と居ます併し夢のやうでもね彼の時の鮎太郎と今の鮎太郎さんとを較べて見たら若し脚の母様が在られたらとんと別の人かと思はれませうよ」鮎太郎は唯だ無言よ仰見たりその唇のヤ、頰へてその眼に涙あり、

その年の秋東洋の大戦の平和もありて北の洋の氷の家も棲む侏儒南の洋の珊瑚島その島陰に魚を漁る黒奴まで大日本帝國の威名に到らぬ限もあし眼の碧き人膚の黒き人皮を衣る人髪を編て垂げし人世界も有ゆる國人等の豊かさ昇る旭日の御旗を打ち仰ぎて大日本帝國の大皇帝の御代を頌ぐ世もありたり、

太平洋終

凱旋の軍を迎る國民の歡喜前古未曾有の盛觀のその中に春海大佐富士山朝彦五島秀夫荒磯の鮎太郎も亦勇ましく歸り來れり月を越えて五島秀夫の美しき新夫人を迎へたり夫人の實も君子嬢あり鮎太郎の先母の消息を聞くと故郷沼津へと歸りぬ歸れば唐津屋の俵客の家に母の秋より養はれ居たりけり、
鮎太郎は富士山朝彦も眷願れて母子諸共その邸も養はれ鮎太郎は學校も入れられたり六年の後學成りて復た外國へと遊學せしが三年もして歸朝し青森二十七歳の折富士山朝彦の氷人にて美人を妻とせり夫人は春海令嬢の子あり陳羅剛とお堀といひ養ふバゴンの島へ捨られたるまゝ消息もなし狂悪ある黒奴どもも喰れしからん五島家と荒磯家といひ幾千代かけて御代太平の春をや歌ひ樂むらん
(天團圓)

明治廿九年十二月廿二日印刷
 明治三十年一月二日發行

版權
 所有

著者 遲塚金太郎
下谷區御徒土町壹丁目廿六番地
 日本橋區通三丁目十三番地

發行者 內藤加我
日本橋區新和泉町一番地

印刷者 瀧川民治郎
日本橋區通三丁目十三番地

發兌 金櫻堂
日本橋區新和泉町一番地

印刷所 今古堂活版所
日本橋區新和泉町一番地

●給日清戰國實記全

本書は朝鮮東學黨蜂起の顛末より日清開戰連戰連勝を以て清帝降服并に台灣島平定我軍凱旋に至る迄の實況細大漏す所なく編纂して以て一部とす乞ふ我愛國諸君本書を座右に備へ以て凱旋の帖とせられん事を

- 茲愛堂主人著 ●繪入男女育兒法全
- 楊名會桃李口演 ●松山八百八狸全
- 一穴庵貉速記 ●奇談
- 田邊大龍口演 ●東海日本左衛門全
- 今村治郎速記 ●白浪
- 眞龍齋貞水口演 ●觀世音野狐三次全
- 今村治郎速記 ●利生記
- 丸亭素人譯 ●小説鬼車全
- 放牛舍桃林口演 ●東台俠客傳全
- 酒井昇造速記 ●小猿七之助全
- 松林伯圓口演 ●須藤南翠外史著 ●忠孝美談復讐全
- 酒井昇造速記 ●勤王娘倭錦全

○邑井一口演 ●千鳥鳴眞砂白浪全

- 酒井昇造速記 ●桃川燕林口演 ●新吉原百人斬全
- 今村治郎速記 ●小林藏月著 ●三郎虎勝刻近
- 雙龍齋貞鏡口演 ●浪上義三郎速記 ●天正八勇士傳全
- 高橋雲嶺著 ●新撰活用新体用文案內全
- 後藤訓點 ●四書片假名付 全四册
- 諸大家合作 ●繪入征清大捷軍歌全
- 骨皮道人著 ●滑稽演說全
- 繪本支那征伐畫譚全
- 連勝愉快ぶし全
- 永大雜書三世相小本全
- 新井先生著 ●吉岡易學獨判斷全

